
～ サマー ～

稲穂 約仕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「サマー」

【Nコード】

N5332C

【作者名】

稲穂 約仕

【あらすじ】

小野寺秋斗おのでらあきとは大学を何事もなく卒業したが、就職試験に落ちてしまい途方にくれていた…。そんなある日一通の手紙が秋斗を変える。

プロローグ

…

…

…

『——や…』

俺は立ち止まり、振り替える。

そこには、着物を着た白髪の老婆が一人立っていた。

（誰だ？）

俺は目を凝らし相手の顔を見ようとするが、目が霞んで良く見えなかった…。

『おばーセミとった！』

元気な声が俺の横を走って行く…

『——はいつも元気だね…』

老婆は優しく微笑む

『うん！…あれ、そのこだれなのおばー？』

指摘されて気が付いたが、老婆の後ろに隠れている女の子がいた。

髪は金髪、目の色は深い青、服装は老婆と同じ着物である。

『ぼくは、おのであきと…きみはなんてなまえなの？』

（そうか…）

少年は老婆の後ろに隠れている女の子に名前を聞く…

『わ、わたしは…ほ、たる…ひなた ほたる…です…』

女の子は恥ずかしそうに自分の名前を口にした。

（これは…）

少年はニツと笑うと手に持っていたセミを女の子に見せ…

『おまえむしみたいだなまえだな…！』

（あの時の…）

『むしゅーな…！』

女の子は顔を真っ赤にして…少年にアップercutをくらわせた…。

（夢…）

少年は放物線を描きながら飛んで行く…

手で捕まえられていたセミはこれ幸いと慌てて逃げ出してしまった…。

…

…

…

…

景色が足早に流れて行く…

段々懐かしい風景へと変わって行く…

「ふう…あと2駅か…」

どうやら、長い時間眠っていたようだ…

まあ、目的地が終点の駅なので乗り過ごすことはまずないが…。

「早く着かねーかな…」

いい加減…電車に飽きてしまった。

好きな人は良いだろうだが、そうでない人にとってする事と言えば…
寝る、読書、友達と喋る、独り言を言う、風景を楽しむ…などだろう。

まあ、喋る相手も居ないし、読書するための本もない、それに風景は朝から田んぼか山しか見えてないし、それから独り言を言うほど病んでいない…

「やっぱ寝るに限るよ」

故に寝ていたのだ。

《間もなく終点…嵩千穂、嵩千穂―降り口は左側に成ります。》

「え！後2駅あるんじゃないかったけ？」

まあ良いか、それより早く降りる支度をしなくては…

「荷物、送れば良かったな…。」

俺は頭の上にある金網からボストンバックとスーツケースを降ろした。

《終点、嵩千穂―嵩千穂―降り口は左側です》

「…さあて降りるか…」

俺は荷物を持ち、或いは引きずりながら降りたのだった。

少しの希望と、思い出と共に…

…

…

…

…

プロローグ（後書き）

え〜と…

何となく書いてみました。

感想待ってます。

第一話 記憶

駅のホームに、降り立った俺は、人目を気にすることなく、大きく伸びをした。

「うーん、この空気…やっと戻って来たって感じだな」

俺は更に数回深呼吸する。

やっぱり帰って来て良かったのかも知れない…。

「ふう…さてつと行くとするか。」

俺は手荷物を持ち直して、誰もいない、無人駅を後にした。

「今日もいい天気ですね」

私は真つ青な空を見上げて、そう呟いた。

きっと、雲一つ無い空とはまさにこの青空のことを言つのだろう…。

「ほたる、ほたるどこにいるの？」

私の姉、甘奈かんなが私を探しているようだ。

「あ、いたいた。」

やっぱりここだったか…。」

甘奈は呆れたような顔で、そう言った。

「ほたるは本当にここが好きだねー」

こことは、縁側のことを言っているのだろう…

「そうでもないですよ、ただ…」

「ん？」

「…ただ…ここに来ると、とても気持ちが楽になると言いますか、嬉しくなると言いますか…」

正直に言くと、自分でも分からない。

何でここに、そんな感情が芽生えているのかが…

「それを好きって言うんだよ…」

甘奈は私の頭に手をやり、私の頭を撫でながら言う。

「まあ、ゆっくり思い出していこうやないのほたる」

言い終わると甘奈はニッコリ笑った。

「ごめんなさい、甘奈さんにご心配ばかりお掛け…イタ」

私のおでこに、デコピンが炸裂した。

「お姉ちゃん…ね？」

甘奈は“今度そんなこと言ったら…”みたいな顔をして私を見ていた。（□元に意味ありげな笑みを浮かべて）

「は、はい…えっと…甘二姉さん」

「今かんだ？」

「いえいえ、気のせいではないですか？」

甘奈は用が済んだのかも来た廊下を戻っていった。

私は深く溜め息を尽きました。

何故なら私には、ここ最近の記憶から、昔の記憶がスッキリ、スッポリ無くなっていました。

そのため、甘奈が肉親あることや父や母のことともそうだが、天津さえ自分のことさえ覚えていなかったのです…

「私は誰なんだろう…」

私はまた、空を見上げて呟いたのだった…。

青い…

青い、青空を見上げて…

第一話 記憶（後書き）

何か一言言わなくては！！

っと言っても思いつきません。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5332c/>

～ サマー ～

2011年2月2日03時51分発行